

私の戦争体験

村井 正治

本町一丁目

昭和十五年、中学生（旧制五年）四、五年生は週一時間、軍事教練の時間があり、軍隊から将校（少尉）が一人配属され、小銃の手入れ、分解、掃除、分隊毎の戦闘訓練が行われた。雪が降ると雪中行軍と称して授業はせず、一日二〇キロ位、雪中を銃を負って行軍した。

中央大学に入ってから軍事教練があり、分隊、小隊の戦闘を訓練された。後に軍隊に入り、これが予備教育であったことが分かった。

昭和十七年のある日、大学の三階の一室で授業中、米海軍の艦載機が川崎方面にとんで行くのを、何もわからずに見ていたのをおぼえている。米軍機が飛び去ってから空襲警報が鳴り、川崎方面に煙が上がった。翌日の新聞では「損害は軽微なり」とあったが、世界一の海軍がありながら、と不安を感じた。すでに戦は敗けていたのである。しかし、私達国民には知らされなかつた。

昭和十八年、宇都宮東部第四部隊の自動車隊に入隊。自動

車隊としての教育と幹部候補としての教育を受けた。早く指揮官をつくるための教育なので、上官の命令としてなぐられ、隊内一周四キロを走らされるなど、めまぐるしい日々だった。しかし、これを持ち越えられたからこそ今日の生命があるのだと感謝している。私はここまでは出来るという自信が出来たからである。

東京・目黒の大橋にあった甲種幹部候補生学校は、自動車輸送の将校としての教育を行った。川に橋のないときの渡河訓練、暗夜の無燈火運転、空襲の激しくなったときの昼間の輸送法等訓練はあらゆることを想定して行われた。

今の自衛隊のある富士の裾野に展開して演習していた時（昭和十九年七月頃か）、初めて米軍のB 29の大編隊が高度一万メートルで白い飛行機雲を引いて富士山を目標とし、それから東京方面に角度を変えて飛んで行くのを、小銃を抱いて空しく見上げていたのを鮮明に記憶している。

十二月、同校卒業の日に空襲があり、至近弾が落ち、卒業式

もそこそこに防空壕に入り、そのうす暗い中で見習士官の襟章を付けかえたのも良く記憶している。同年兵には、時の内閣総理大臣近衛さんの二男の方、戸田侯爵のご長男、王様クレヨンのご長男の方等、有名人がいた。

昭和二〇年四月、私達四九名は各県から一名ずつ選ばれてこの憲兵学校に転属した。現在の中野駅北口にあるサンプラザ、中野区役所、中野税務署、中野都税事務所、警察学校等の場所には、憲兵隊と中野電信隊があった。駐輪場の所は私達将校の食堂だった。国鉄のレールに沿って馬小屋があり、四十余頭の私達の練習用の馬がいた。また、サンプラザ側のバス停のところには、拳銃の射撃場があった。

昭和二〇年三月十日午前零時、空襲警報が鳴ると同時に、高く低く四方八方から敵B29が侵入し、江東方面を無差別攻撃した。この時私は四九名の防火班長をしていたので、防空壕の上立ち(まだ松の根元には雪が十センチほど残っていた)、軍刀を杖に空を見上げていた。下町は赤い火に包まれ、日本軍の高射砲弾は一万メートルまで届かず、機関砲は洩光弾の跡を残してこれも届かず、ただ呆然と空を見上げるばかりであった。ただ日本空軍の特攻機一機がB29に体当たりし、B29が火を吹いて東京湾に落ちて行った。おそらく私と同年であろう特攻機の彼を思い、ご冥福を祈るばかりであった。下町の被害はご存じの通り初めから逃げられぬように周囲から焼夷弾を落とすし、火

を避けて川に入った人の上にまた人がとびこみ、下の人は水死、上の人は火災による無酸素状態のため、無傷のまま死亡するという悲惨この上ない状態であった。

宇都宮憲兵隊での私の任務は、軍隊の秩序維持と皇室の方々のご警護であった。誇りに思うことは一つ。今上天皇陛下が未だ学習院初等科の頃、日光御用邸に戦火をさけてご滞在中、私の部下の荒井伍長一名を派遣してご警護申し上げたことである。もちろん私も宇都宮で、直ぐお近くでご警護申し上げ感激ひとしておであった。また数多くの皇室関係の方々のご先導、ご警護は私の一生の思い出である。

昭和二〇年七月十五日、敗戦の丁度一か月前、雨がどしゃぶりの真夜中、空襲警報が鳴り、雨だから爆弾は落とせないと思っていたにもかかわらず、宇都宮市の中心街に焼夷弾が落ちて来て、街の大半を焼きつくした。敵は雲上からも電波兵器により街の様子がわかり、いわゆる絨毯爆撃(じゅうたんばくげき)をしてきたのである。占領後、米軍が使用可能と見た師団司令部、陸軍病院、歩兵第三六部隊、私の古巣東部第四部隊等、道路の西側を残し市街地を焼き払った。誠に敵ながら心にくいばかりであった。

憲兵隊本部は街の中心地、木造二階建てのこの市役所の側にあり、大谷石の三階建てであった。ある時、火と火災による横なぐりの強風にとりのこされ、隊長以下防火用水に首までつかり夜を過した。私は命により宇都宮から東京の憲兵隊本部に電

話報告をするため(本部との直通電話は不通であった)、二〇キロ離れた小山市郵便局まで菊地軍曹の運転するサイドカーに乗り、横なぐりの風と炎、トタン屋根やガラス戸がとび、油脂焼夷弾の油が火となって道路を横切る中、車のタイヤが焼けるかパンクするかという状況で走り抜け、「市内七か所より火災発生、目下延焼中」との電話連絡を憲兵隊本部に入れた。翌日早朝、私の戦友の山崎見習士官が、部下一五〇名を指揮して来援し、市内及び真岡市の焼け跡の警備にあたった。私が報告を終わり、隊に帰った朝、隊長以下現場にいた者は炎と灰で顔は黒く、目は真っ赤になり実に悲惨なものであった。

最後にこの大戦に参加してたおれた多くの方々に心からご冥福をお祈り致します。

